

# 沖縄県水産海洋研究センターニュース (第14号)

2008年(平成20年)12月発行

本所 〒901-0305 沖縄県糸満市西崎1丁目3番1号  
 TEL: 098-994-3593 FAX: 098-994-8703  
 石垣支所 〒907-0453 沖縄県石垣市宇川平828番2号  
 TEL: 0980-88-2255 FAX: 0980-88-2114  
 ホームページ: <http://www.pref.okinawa.jp/fish/>

## 平成19年の沖縄県における魚介類養殖生産量、生産額及び魚病被害額の速報

平成19年の沖縄県における魚介類養殖生産量と生産額を表1に示しました。生産量は合計で1,010ト、生産額は32億4,600万円でした。このうち、クルマエビは生産量596ト(59.0%)、生産額27億9,800万円(86.2%)でした。

魚類養殖をみると、生産量はウナギ121ト、ハマフエフキとヤイトハタ75ト、マダイ71ト、スギ64ト、その他の魚類7トの順でした。生産額はウナギ2億円、ヤイトハタ8,300万円、マダイ5,400万円、スギ5,300万円、ハマフエフキの4,800万円、その他の魚類1,100万円の順でした。

表1 平成19年の沖縄県における魚介類の生産量と生産額

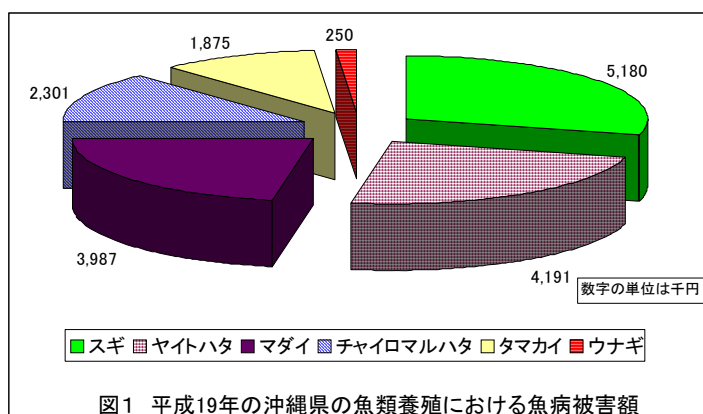
種名	生産量(kg)	生産額(千円)
クルマエビ	596,044	2,797,356
ウナギ	121,213	200,389
ハマフエフキ	75,139	47,977
ヤイトハタ	74,948	82,785
マダイ	71,457	54,296
スギ	64,121	52,868
その他の魚類養殖	7,287	10,881
合計	1,010,209	3,246,552

平成19年の生産量と生産額を前年と比較すると、クルマエビ養殖は生産量で15%、生産額で5%減少したのに対し、魚類養殖は生産量で40%、生産額で27%増加しました。クルマエビの減少はビブリオ病の被害の拡大が原因でした。魚類養殖の増加は、ウナギ養殖に対するアンケート回収率が前年の33.3%から100%に向上したためでした。

平成19年の沖縄県における魚病の被害額は5億4,800万円、このうちクルマエビが5億3,000万円と全体の96.8%を占めました。クルマエビの魚病ではビブリオ病が3億8,500万円、フサリウム症の1億4,500万円と平成19年はビブリオ病による被害が大きい年でした。

図1に平成19年の魚類養殖における魚病被害額

を示しました。総被害額は1,800万円でした。最も被害が大きかったのはスギの518万円で、以下ヤイトハタ419万円、マダイ398万円、チャイロマルハタ230万円、タマカイ187万円、そしてウナギ25万円の順でした。平成19年は、スギの類結節症が魚類で最も大きな被害を起し、その他ではヤイトハタとマダイのイリドウイルス病、チャイロマルハタとタマカイのハダムシ症、ウナギのベコ病による被害の多い年でした。



平成19年の魚病被害額を前年と比較すると、クルマエビでは64%増加し、魚類では24%減少しました。クルマエビでの増加はビブリオ病による被害の拡大が主な要因でした。それに対して、魚類での減少はスギの類結節症による被害が少なかったためでした。

魚病による被害は、魚病の種類や発症サイズによって大きく異なり、年による変動も大きいものです。養殖生産量、生産額、魚病種類および被害額を調べることは、養殖現場の現状を把握し魚病対策を検討するうえで、重要な資料となります。今後も継続してアンケート調査を実施しますので、養殖業者の皆様のご協力を宜しくお願い致します。

(本所海洋資源・養殖班: 玉城英信、  
水産課: 渡邊環)

## 第2回琉台技術交流会に参加して

平成20年12月3日に、第2回琉台技術研究交流会が台湾で開催されました。この交流会は、沖縄と台湾の農業・林業・水産業・畜産分野などの技術者が集まり、お互いの研究成果報告や技術交流、情報交換などを行う場です。1986年に始まったこの交流会は、平成18年度に名称が変更されたものの、これまでに延べ11回も開催されています。



この交流会では、全体での会議に加え、専門分野ごとに分かれて詳細な技術報告や情報交換を行う分科会があります。水産分野の分科会では、台湾での免疫賦活剤(栄養強化剤)を用いた魚病の予防について、これまでの試験研究成果の報告をしていただきました。この報告によると、スエヒロタケ *Schizophyllum commune*(キノコ的一种)から抽出されたβ-1,3-1,6-グルカン(多糖類)を餌に混ぜて与えることで、スギの類結節症や連鎖球菌症に対する免疫力(病原菌とたたかう力)が増加し、病気による死亡率が低下しました。この他にも、前述の多糖類を与えることにより、急性ウイルス血症(PAVまたはWSD)感染への抵抗力増強がウシエビ(ブラックタイガー)で確認されています。日本国内と同様に、台湾でも、免疫賦活物質を用いた養殖魚の免疫力強化と魚病対策に関する研究が進められていました。

台湾でも、スギの類結節症、ハタ類のウイルス性

疾病(イリドウイルス病や神経壊死症(VNN))による魚病被害が大きいことから、沖縄と似た問題を抱えているように感じました。特に魚病被害の大きいスギの類結節症については、ワクチンの開発も進められていますが、病気の原因となる細菌の性質が変化しやすいことから、十分な成果は得られていないようです。

今回の交流会が台湾で行われたこともあり、会議終了後、台湾の農林水畜産分野の試験研究機関を視察することができました。水産分野の試験研究機関のひとつである「生技研究中心」(下写真)では、主に海産魚類(スギ、ハタ類)とエビ類の種苗生産や養殖、育種に関する試験研究を行っていました。また、近年では台湾でもマグロ類の畜養が盛んになってきていることから、人工種苗による養殖を目指し、陸上円形水槽でキハダマグロの親魚養成を行っていました。



今回の交流会を通じて、水産だけではなく幅広い分野の技術に触れ、また多くの方々と交流し、たくさんの方の事を学ぶことができました。いつもとは違う切り口で物事を見つめ直すことが、新たな技術の開発に繋がればと思います。

(本所海洋資源・養殖班: 知名真智子)